

A-007「兔置」(肅肅たる兔置)『詩経』国風 周南

「うさぎ網」

AKY訳

(原詩)

(読み下し文)

ぴんと張ったぞうさぎ網

肅肅兔置

肅肅(しゆくしゆく)たる兔置(としや)

とんととんと杭(くい)うつて

椽之丁丁

之を椽(たく)すること丁丁たり

力溢れる我輩は

赳赳武夫

赳赳(きゆうきゆう)たる武夫(もののは)

我が殿様のよき家来

公侯干城

公侯の干城(かんじょう)

ぴんと張ったぞうさぎ網

肅肅兔置

肅肅たる兔置

選びに選んだうさぎ道

施于中逵

中逵(ちゆうきに)施(いた)る

知恵が溢れる我輩は

赳赳武夫

赳赳たる武夫は

我が殿様のよき参謀

公侯好仇

公侯の好仇(こうきゆう)

ぴんと張ったぞうさぎ網

肅肅兔置

肅肅たる兔置

林の奥まで分け入つて

施于中林

中林(ちゆうりん)に施(いた)る

勇氣溢れる我輩は

赳赳武夫

赳赳たる武夫は

我が殿様のよき相棒

公侯腹心

公侯の腹心

「うさぎ網っていうやつあ、風が吹いたつてガサゴソ音がしない様にぴーんと張らなきゃだめなんだ。音がしたらうさぎが網に気がついちまう。おいらみたいに力のあるものじゃなきゃできないこつた。」

仕掛けるにゃあ、うさぎの通り道を選ばなきゃね。うさぎがこないところに仕掛けたつてだめだ。おいらみたいに知恵の回るもんだからできるんだ。

それも林の奥のほうまで入っていつて仕掛けなきゃならない。そうじゃなきゃうさぎなんかいるもんか。おいらみたいに勇気のあるもんじゃなきゃ、そんなところまで一人でいくこたあできっこない。

どうだ、おいらあ、いい家来だろう？ お殿様あきつと褒めてくれるぞ。お前は、家来以上だ。参謀だ。いい仲間だつてな。」

うさぎとりの網がうまく張れたというだけで、すっかりいい気持ちになつている、胸を張つて大手を振つて。まるで勝ち名乗りを受けて、意気揚々と花道を引き上げてくる高見盛みたい。あるいは、NHKの人形アニメにも出てきそうな、たとえば「ひよこりひよたん島」の海賊船長のような。

威張つては、いるけれど、どこかかわいい、純真素朴な田舎の青年の様子が目に浮かんでくるようです。

「使われている言葉について」

- 肅肅(しゅくしゅく)、静に音をたてず。丁々と音をたてて杭を打つているのだから、音をたてないというのは、網を張るときではなく、張つたあと、風などで、がさごそ音をたてないようというのだろう。それゆえ、「ぴんと張る」と訳した。
- 免置(としや)、置は、「しよ」とも読む。網のこと。
- 椽(たく)、打つ、網を張るための杭を打つ。
- 丁丁、杭を打つ音。擬声語。
- 赳赳(きゅうきゅう)、強く勇ましい、猛々しい。
- 干城(かんじょう)、堅く守る。また、その人。武人。干は、盾。
- 施(いたる)、施は、旗のなびく様(白川静、字統)。ここでは、網を張り至るの意(白川静、「詩経国風」東洋文庫)。

• 中逵(ちゅうき)、逵は、みち。分かれ道。兔網なので、うさぎの通る道のことと解した。

• 好仇(こうきゅう)、よき仲間。仇は、対等の相手をいい、怨仇ではない(白川静、「詩経国風」東洋文庫)。

• 中林(ちゅうりん)、林の中。林中、韻のため倒語としている。

• 腹心、股肱の臣、もつとも肝要な人物。

この詩にも種々の解釈があります。諸侯やその妻達が優れていれば、世の中に徳が広まるとか、優れた人が集まってくる。あるいは、うさぎ取りを生業にする野人でも立派に役立つという詩だなどとする説もあり、鄭玄や朱子などの注釈でそうなつているのだそうですが、そのような解釈の根拠が示されていないので、私には、なんともわかりません。詩に書かれている言葉だけからイメージして上の詩になりました。